

旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究（その2） 解体材料と復原材料からみた「様式保存」について

正会員 ○大内田史郎*
正会員 渡邊舞**
正会員 本橋仁***
正会員 豊島麻由佳****
正会員 中川武*****

旧帝国ホテル 博物館明治村 様式保存
移築

1. はじめに

本研究は、フランク・ロイド・ライト設計の旧帝国ホテル(1923-1968)を対象に、その解体時および移築時における史料や材料等の調査を通して、当時の博物館明治村の館長であった谷口吉郎(1904-1979)らが提唱した「様式保存」の検証を行うとともに、解体時と移築時の全貌を明らかにすることを目的としている。

2015年度より早稲田大学と工学院大学との共同研究として調査を開始しており、早稲田大学特定課題研究助成費(課題番号 2015B-230)による研究成果の一部である。本稿では、旧帝国ホテルの中央玄関部の移築に伴う解体材料と復原材料に着目して、「様式保存」に関する考察を行う。

2. 調査概要

本稿での調査の内容は二つに大別される。一つは移築された旧帝国ホテル中央玄関での実地調査、もう一つは移築工事の担当者であった西尾雅敏氏(1946-)の著書『帝国ホテル中央玄関復原記』¹⁾の内容の分析である。

2.1 移築された旧帝国ホテル中央玄関について

旧帝国ホテルは1923年に竣工し、政府要人や国賓をももてなす施設として機能していたが、客室数の少なさや老朽化等の問題によって1967年11月に取り壊しが決まり、同年12月に博物館明治村への中央玄関部の移築が決定した。そして、1967年12月から約3か月間で解体され、移築の工事としては1970年3月に着工した後、1976年3月の躯体・外装の竣工を経て1985年10月に内装が完成し、現在のような一般公開が始まった。

移築は1943年1月27日の「博物館明治村建築委員会」²⁾にて決定した「様式保存」という方針に則って行われ、構造形式はRC造からSRC造に変更された。移築された建物の建築概要としては、構造・規模はSRC造・3階建て、建築面積は911㎡であり、2004年2月には登録有形文化財となっている。

2.2 『帝国ホテル中央玄関復原記』について

『帝国ホテル中央玄関復原記』は、帝国ホテルの移築に博物館明治村の建築担当部長等として携わった西尾雅敏氏が当時の移築の様子を書き記した著書である。その内容としては、工事の基本方針から始まり、工事の様子や材料の検討状況、工事関係者のやり取りまで詳細に書き記されているが、図版や写真が殆ど掲載されていない。

2.3 調査内容

そこで、2015年10月に旧帝国ホテル中央玄関に関する明治村所蔵の解体材料(創建時のオリジナルの材料)と復原材料(移築時に製作された新しい材料)についての調査(材料毎の類型化等)を行った。さらに、2016年1月28日には西尾氏へのヒアリング調査を実施し、現状の建物と『帝国ホテル中央玄関復原記』の内容との照合を行った。以下にその調査結果の要点について述べる。

3. 調査結果

『帝国ホテル中央玄関復原記』によると、解体時には限られた時間しか無く、解体現場の中で必要な部材を見つけ出して運び出していく様な作業が行われ、解体材料の総量は約400トンであった。

以下に調査で確認された材料のうち、旧帝国ホテルを構成する主な材料である、3.1では解体材料「スダレ煉瓦」と復原材料「スクラッチタイル」について、3.2では解体材料「大谷石」と復原材料「大谷石風コンクリート」について、3.3では解体材料「テラコッタ」と復原材料「テラコッタ風プラスチック」についてそれぞれ判明した事柄を記述する。

3.1 「スダレ煉瓦」と「スクラッチタイル」

移築において、解体材料のスダレ煉瓦が用いられている主要な部位は正面車寄せの2本の柱部分であり、それ以外の部位には多く復原材料が用いられていることが判明した。

解体材料と復原材料の最も大きな違いはその厚みであり、解体材料のスダレ煉瓦(図1)は厚みが50mmで、施工方法としてはそれらを煉瓦のように積み上げ、鉄筋を挿入した後、コンクリートを流し込み一体化させることで全体を構成した。この施工方法が解体材料の多くを再利用できなかった大きな要因の一つであると考えられる。これに対して、復原材料は厚さ15mmのタイルのような形状(図2)になっており、SRC造の躯体に張り付ける方法で施工されている。

また、復原材料のスクラッチタイルにおいても外装部分と内装部分では仕様が異なることが分かった。これは外装の施工時に製作したタイルのスクラッチ跡が整いすぎてしまったことから、内装の施工時には解体材料のテクスチャーに少しでも近づけるために、タイルのスクラッチ跡を意図的に荒くしたことによる違いである。



図1 スダレ煉瓦 (左: 正面、右: 断面)



図2 スクラッチタイル (左: 正面、右: 断面)

3.2 「大谷石」と「大谷石風コンクリート」

解体時、大谷石は劣化が進行していたため、解体材料の再利用は難しかったようである。再利用部分の中でも中央玄関の正面から向かって右側の腰石部に使用されている大谷石は、解体時に分割した部材を再構築したものであるが、左側の腰石部に使用されている大谷石は、新しい大谷石を用いて設計図を基に削り直したものである。

解体材料の大谷石を採用できなかった個所や、風雨等によって今後劣化が想定される個所については、大谷石風のコンクリートとして、PC (Precast Concrete) と GRC (Glass fiber Reinforced Concrete) (図3) が使用されている。GRC の採用の決定に至るまでは、大谷石風のプラスチック (図4) やアルキャストを用いることも検討されていたが、経年劣化や意匠等における問題が指摘され、採用されるには至らなかった。また、来館者の視線に入りやすい部位には、優先的に解体材料の大谷石が用いられていたことも分かった。



図3 解体材料の大谷石 (左) と復原材料の大谷石風 GRC (右)

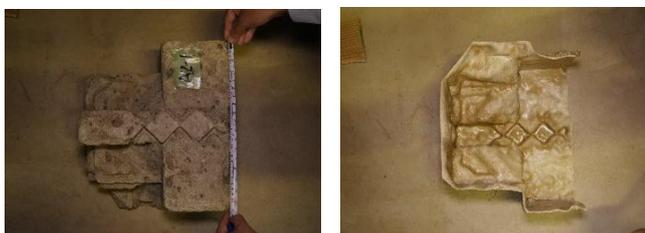


図4 大谷石風プラスチック (左: 正面、右: 裏面)

3.3 「テラコッタ」と「テラコッタ風プラスチック」

西尾氏からのヒアリングによると、テラコッタの形状は全部で4種類あり、移築時の解体材料の再利用率は全

体の約6割となっている。形状によっては部材を半分に分割して使用している部位 (図5) も発見されたが、これは移築時の改良ではなく創建時の旧帝国ホテルで既に用いられていた施工方法であった。

また、正面車寄せの天井面のテラコッタは、剥落の危険性を想定して、解体材料よりも軽量のプラスチック製の材料 (図6) が用いられていた時期があった。しかし、この材料は経年変化によって反り返りが生じてしまったため、余っていた復原材料のテラコッタ (内装用) を薄く切り直した材料に取り換えることとなったという。



図5 解体材料のテラコッタ



図6 テラコッタ風プラスチック

4. まとめ

当時の「様式保存」という方針においては、「建築の寿命を延ばすこと」「建築の維持管理性能を高めること」「来館者が安全かつ自由に見学できる建造部としての耐久性をもたせること」を最優先課題として移築が行われることになり、それらの課題を解決する手段として、創建時のオリジナルの材料を極力再利用しながらも、様々な検討を重ねた上で、新技術を用いた素材による復原材料の積極的な採用も確認できた。また、復原材料の製作にあたっては、オリジナルにより忠実さを求めるという、ライトの意匠への可能な限り近づけようとする意図がみうけられた。

これらのことから、旧帝国ホテルの博物館明治村への移築においては、視覚的な意匠の保存と維持管理性能や安全性を重要視することによって、より多くの来館者に適切にライトのオリジナルの意匠を見せることを狙ったものだったと考えられるのではないであろうか。なお、本稿は主な材料の総体的な概略の調査に基づいているが、今後は材料の種類別それぞれの解体材料と復原材料について、より詳細な調査を実施していく予定である。

5. 謝辞

本稿に関する調査に際しては、博物館明治村の元建築担当部長の西尾雅敏様、博物館明治村の中野裕子様と石川新太郎様に多大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表す。

<図版出典> 全て筆者撮影による

<注>

- 1) 西尾雅敏:『帝国ホテル中央玄関復原記』, 博物館明治村, 2010
- 2) 委員会は、谷口吉郎(委員長)、藤岡通夫、城戸久、関野克、太田博太郎、飯田喜四郎、伊藤三千雄、市川清作、菊池重郎(幹事)によって構成されていた。

*工学院大学建築学部 准教授・博士(工学)

**工学院大学工学研究科建築学専攻・修士課程

***早稲田大学創造理工学研究科・助手

****早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻・修士課程

*****早稲田大学・名誉教授、博物館明治村・館長

*Assoc Prof., Faculty of Architecture, Kogakuin Univ, Dr. Eng

**Graduate Student, Faculty of Eng., Kogakuin Univ

***Research Assoc, Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ.

****Graduate Student, Faculty of Eng., Waseda Univ.

*****Professor Emeritus, Waseda Univ. Director, the Museum Meiji-Mura